# 伊丹城跡発掘調査報告書Ⅰ

昭和５１年３月

伊丹市教育委員会

# 序

伊丹郷町の発祥と深いつながりをもつ伊丹城は、近世初頭に廃されて、人々の記憶からも次第に薄れてしまいました。江戸時代にみられる伊丹町の繁栄とは対照的な城跡の荒廃ぶりであったといえましょう。明治になって、鉄道の敷設に際し、城跡の東半が掘削され、その後も駅前の開発にともなって、次第に城跡はその原形を失っていきました。

この忘れられた城跡について、伊丹市史の編纂および伊丹市立博物館の開館に際し、鈴木　充氏（大阪市立大学講師・建築史）により、復原研究が試みられ、かつての伊丹城の姿が、順次、明らかにされてまいりました。

しかし、それとともに、すでに進められてきた国鉄福知山線複線化にともなう伊丹駅前の整備事業による工事対象区域に、城跡の西半の大部分も含まれていることが判明しました。

そこで当市では、伊丹城跡の緊急発掘調査の実施にふみきりました。昭和50年度には、調査費200万円を計上し、伊丹城跡調査団に委嘱し、工事対象区域の南部にあたる有岡乳児保育所跡および伊丹保育所跡の２カ所の敷地について、第１次発掘調査を実施しました。昭和51年度にも、のこる全域について、第２次発掘調査を行なう予定です。

第１次調査の結果を、市民のみなさまに早くお知らせするために、ここに『伊丹城跡発掘調査報告書』Ⅰを作成しました。

なお、この報告書を発刊するに際し、調査団長鈴木　充氏をはじめ、調査員の山本芳彦・織田誠一郎氏や調査補助員・作業員のみなさん、さらに調査に終始協力いただいた、大手町自治会長吉田昌功氏・橋本工務店主橋本　昇氏はじめ地元の方々に、厚く謝意を表します。

昭和51年３月31日

伊丹市教育長　戸田　龍馬

# 目　　次

Ⅰ　伊丹城の歴史……1

Ⅱ　発掘調査の経過……3

Ⅲ　遺構の解説……4

Ⅳ　遺構の考察……8

Ⅴ　遺物の考察……10

Ⅵ　図　　面……13

1　伊丹城跡推定図

2　調査地区図

3　遺跡実測図

4　遺物実測図

Ⅶ　図　　版……23

遺跡写真

# 凡　　例

本報告書は伊丹城跡調査団(団長　鈴木充)が伊丹市の委託金２００万円で行なった昭和５０年度伊丹城跡発掘調査の報告書である。本報告書の執筆はⅠⅡⅣを鈴木充、Ⅲを織田誠一郎、Ⅴを山本芳彦が担当した。図版の作成は１．２を鈴木充、３を織田誠一郎、４を山本芳彦が担当し、写真は鈴木充の撮影による。

# 伊丹城跡発掘調査報告書Ⅰ

## Ⅰ　伊丹城の歴史

### 1．　伊丹城遺跡

国鉄福知山線伊丹駅の周辺は伊丹城の古蹟である。そこは、猪名川の西側に６ｍぐらいの高さで続く伊丹段丘が東へ張りだしたところである。その段丘の東縁を、削り取るようにして、国鉄伊丹駅の古い駅舎が建つ。上りと下りのプラットホームを結ぶ跨線橋の下段にある、鋳鉄の円柱には、『明治四十四年』『鉄道院』という文字が浮彫にされていて、明治３２年の阪鶴鉄道開通後、ほどなく建てられた駅舎であることがわかる。

駅舎の西は、狭い駅前広場を隔てて、南あがりの坂になった街路が通っている。その西側は切り立った崖の上に、荒木村重の菩提を弔う荒村寺や金光教会の建物があり、その間を抜けて、西へ向う街路が、段丘の東縁を切開いて設けられている。金光教会の北と西で、段丘はくびれこむように急激に落ちこみ、急な斜面をのぼりつめた台地の縁には３ｍあまりの土が高く盛りあげられ、うつ蒼とした樹林がその上を覆っている。この盛土は、金光教の敷地内からみると、壁のようになって、西方から北方を塞いでいる。また、その築きかたは人工的なもので、これが伊丹城の西北隅を守る土塁であることは確実である。土塁の中で一段と高くなった西北隅に登ると、北の方は宝塚から池田、さらには高槻と、摂津の平野が一望のうちに収められる。南の方は段丘上に生い茂った立木に妨げられて、眺望をかくが、昔は尼崎から難波の海まで見通せたに違いない。

土塁の外側は、西も北も急な崖になっていて、北西隅ではその下が帯状の窪地になっている。この窪地が城をとりまく堀のあとにあたる。江戸時代の古図をみると、城のまわりの堀は、雲上坂にそって南へのび、伊丹停車場線の道路の下を東へ走っている。つづいて、福知山線の線路を横切り、その東で、いまは小さい水路になってしまった猪名寺井（用水）に沿って北へのび、さらに西へ曲って、土塁の下に続いている。いまは、ほぼ完全に埋ってしまっているが、南側の大手町沿には、道路が拡幅されるまで、深さ３ｍぐらいの窪地が残っていたということであり、もとの深さは、駄六川の水位から考えて、６ｍを越えるものであったと考えられる。

駅前の道路を南に登りつめたところには、忠魂碑のたてられている小山がある。この小山は、地元の人に天守台と呼びならわされてきた。しかし、伊丹に伝わる寛文９年の古図をみると、天主台は、国鉄伊丹駅の東の方にあてられており、忠魂碑の小山は二の丸金間と書込まれている。明治中期の地図をみると、福知山線（阪鶴鉄道）は、東へ張出した伊丹段丘を開さくするような形で通されており、駅の東側にも高台があった。その高台が削り取られた時期は、はっきりしないが、いまでも駅の東側に、猪名寺井に沿って３ｍぐらいの高まりが残っており、天守台があったとしてもお

かしくない。そのほか、荒村寺の西にも忠魂碑の小山に似た台地があり、上に行者堂（現荒村寺）と天神祠があったが、いまでは崩されて荒村寺の墓地になっている。

伊丹城の遺跡は、以上のような範囲にあるが、寛文９年の古図によると、濠で囲まれた城内は、さらに空堀でいくつかの区画に分けられていた。主な空堀は、東西方向に２本、南北方向に１本あったようであり、全体が五区画に分れている。北側は通して本丸にあてられ、東側は中央に天守、南に二丸金間があった。西側の区画には呼び名がついていないが、今後の記述の便のため、南側を南郭、中通りを西郭と呼ぶことにする。

## ２．伊丹城の歴史

伊丹城の遺跡が、実際の城郭として名を馳せたのは、応仁乱に引きつづく戦乱の時代においてであった。その多くは、南北朝ごろから摂津の豪族として名前の出てくる伊丹氏の居城としてであり、最後は織田信長の部将であった荒木村重の居城としてである。室町時代末期に、摂津は京都における将軍や管領の権力争いにまきこまれて、何度も戦場になる。伊丹氏の居館のまわりに、堀をほり土塁を築いた家城であった伊丹城は、意外にも防備の固い城として、その名前が記録されている。その経緯については、別の論考があるので（『地域研究いたみ』第四号所収「伊丹城」）、ここでは年表風に事実だけを追ってみよう。

○永正８（1511）　８月10日～24日、伊丹城細川(澄元)赤松の連合軍に囲まれる。
○永正16（1519）　２月18日、伊丹城落城。伊丹但馬守、野間豊前守、城戸をさし、家口へ火をかけて天守で切腹。
○大永７（1527）　三好元長の兵、一カ月以上伊丹城を囲むが、城方が防衛し切る。
○享禄２（1529）　柳本賢晴の軍のため落城。伊丹元扶はじめ三十余人討死。
○享禄３（1530）　細川高国勢３万、高畠甚九郎の伊丹城を三カ月以上も囲むが落城せず。
○天文２（1533）　一向一揆、伊丹城を囲み「らうか」を設けて堀をうめたため、城方は難儀する。
○天文17（1548）　三好長慶、伊丹城を半年近く攻めるが落城せず。和睦なる。

このような具合に、伊丹城は何回かの長期の城攻めにももちこたえているが、これは当時の城としても、めずらしいことであった。しかし、天正２年（1574）になって、織田信長のもとで新しく摂津の守護になった荒木村重は、伊丹氏を亡ぼし、伊丹城を有岡城と改名して、自らの居城とした。その後、村重は信長と離叛したため、天正６年（1578）12月から、信長軍の攻撃を受けた。この時の有岡城は、町を含む段丘の周縁に築いた堅固な外構えが物をいって、11カ月の長期間、信長軍の攻撃に対抗したが、ついに内応者が出て、天正７年10月15日に落城し、村重も失脚した。その後の伊丹城は再興されず、長く古城山と呼ばれて、草木が生い茂るのにまかされた。

伊丹城は最後に村重が有岡城と改名したまま、その活動の幕を閉じる。しかし、伊丹の城が有岡城として存在していたのは僅か５年間であり、伊丹城と呼ばれていた時期はずっと長く、¾世紀以上になる。そこで本報告では、村重時代も含んで、この城を伊丹城で通して呼ぶことにする。

# Ⅱ　発掘調査の経過

## 1.　調査にいたる過程

伊丹城は室町時代末期から著名な城であったが、近世初頭に廃城になり、その後再興されなかったので、だんだんと地元の人々に忘れられた存在になっていった。その跡は古城山と呼ばれ、永いあいだ、樹木が生い茂るままにされていた。江戸時代の中頃になると、西堀が埋められ、あとに人家が建並ぶようになった。また、江戸時代の後期には、城跡の北に駄六川の水を引込んだ舟付きを設け、高瀬舟を使って酒荷を運送するようになったが、このときに、城の北堀は埋立てられて、荷置場にされ、猪名寺井の流路だけが細く残された。天保15年の絵図をみると、城内もかなり耕地ととして使われていたらしく、東辺と南東が籔になり、西中央には小山があり、そこに天神の祠と行者の堂が設けられていた。

明治24年になって尼崎、伊丹を結ぶ川辺馬車鉄道が開通した。このとき、伊丹駅は城跡の近くに設けられたはずであるが、具体的な形はわかっていない。しかし、明治26年に鉄道馬車が軽便鉄道になり、池田まで延長された時には、城跡を開きくして、線路をまっすぐに通したに違いない。軽便鉄道は明治30年に大阪福知山を結ぶ阪鶴鉄道に買収され、ほどなくして、現在の伊丹駅が建設された。こうして駅ができ、交通の便がよくなると附近にも人家が多くなり、道路も整備され、伊丹城の周辺は古城山当時を面影をまったく失なってしまい、どの範囲が古い城跡であるかということも、わからなくなってしまった。

昭和49年になって、伊丹市は、かねて推進していた国鉄福知山線の複線電化が具体化したため、国鉄伊丹駅周辺の整備事業を行うことにした。この事業は国鉄伊丹駅の西側に駅前広場を設け、それに接続する都市計画道路伊丹桜ヵ丘線を整備するものであり、計画では国鉄伊丹駅西の丘陵を削り取ることになっている。この計画が実施されると、旧地形は完全に変り、伊丹駅周辺にあるといわれる伊丹城の遺跡を完全に破壊してしまう恐れがある。そこで、伊丹市教育委員会は史蹟保護の立場から、国鉄伊丹駅周辺整備事業が伊丹城の遺跡に与える影響について、大阪市立大学講師鈴木充の意見を徴した。先に鈴木が伊丹城址を含む江戸時代の旧伊丹郷町の復原模型を作成していたためである。その結果、整備事業が行われると、現在残っている伊丹城の遺跡（東半は国鉄福知山線の建設で破壊されている）のほとんどが消滅すること、および、伊丹城が単に国鉄伊丹駅の周辺だけに防禦施設を設けたものではなく、伊丹段丘全体を城郭とした外構を持った珍らしい城であることなどが指摘された。

このような新しい知見が加わって、伊丹城の史蹟としての評価が高まったため、伊丹市教育委員会は史蹟保護の立場から、行政当局と度重なる協議を行い、計画の変更を求めた。しかし、整備事業はすでに伊丹市文化財審議委員会との協議を経て事業決定を下しており、また、国鉄の複線計画とからみ合っての整備事業であるため、計画の変更もむつかしく、最終的には市長の再決断を経て、

当初の計画通り整備事業を行うことになった。そして、土取りの結果消滅する遺跡については、事業実施に先立って発掘調査を行い、記録を保存することになった。

## 2.　第１次発掘調査の経過

伊丹城跡の第１次発掘調査は、調査費２００万円で伊丹城跡調査団に委嘱された。調査団は鈴木充（大阪市立大学講師）を団長にし、調査員として山本芳彦（考古学）橋本久（伊丹市嘱託）織田誠一郎（大阪市立大学大学院・建築史）が加わり、事務は伊丹市教育委員会社会教育課（課長柳正夫、係長児島恒夫、係坂根憲治）が担当した。また、調査にあたっては地元の大手町自治会（会長吉田昌功）や伊丹市文化財保存協会（事務局長松本一郎）の協力を得、機材に関しては橋本工務店の援助を受けた。記して感謝の意を表したい。

第１次発掘調査の対象地としては、城跡の南西にあたる旧伊丹保育所と旧有岡乳児保育所の敷地を選んだ。この場所が整備事業着工予定で一番早いためである。旧伊丹保育所の敷地は伊丹桜カ丘線の道路に沿って、幅の狭い敷地がかねの手に続いている。調査はまず、この南側の敷地からはじめ、４月５日に表土層を排土、９日から遺構検出にかかった。また、この南側の敷地からはじめのトレンチを通し表土の排土を行った。4月15日から細部の検出を行い、4月18日に写真撮影、引つづき実測を行った。

旧有岡乳児保育所の敷地は、以前に公会堂に使われ、 0.6m の礫層で整地されていたため、２ｔのブルドーザーで表土を排土し、５月６日より遺構を検出した。調査地の南半は深い堀になり、埋土の一部をブルドーザーを使って排土したが、底が深く、側壁が崩れる恐れが強いため、全体を掘ることをあきらめ、東西から段形に掘ることによって、底の深さと埋土の土層を確認した。

５月18日に遺構検出を終え、写真を撮影、実測を行った。その後西郭の北部については、下層遺跡の検出を行い、31日に調査を終了した。

# Ⅲ　遺構の解説

## 1.　南郭

南郭調査区域には前伊丹市立大手保育所が建っていた。発掘面積は 339.2㎡ である。この区域は東側と南側を県道伊丹停車場線に、北西側を隣接する民家のブロック塀によって制限されている幅６～10m 面積 400㎡ のＬ字形をした細長い敷地である。東西に３m 幅のトレンチ16m を設定し、その西端南方に2.5mのトレンチ、東端北方に直交した26m のトレンチをいれた。その各々をＢ．Ａ．Ｃトレンチと呼び、さらにＢトレンチは西側からＢ１．Ｂ２．Ｂ３トレンチに区分した。

Ａ及びＢトレンチの表土には、その部分が保育所の建物全体の床下にあったために、建物撤去後のコンクリート基礎が数カ所に残っていた。表土の厚さはＡトレンチで18～26cm、Ｂトレンチでは

26～46cmであった。表土の中には黒く焼けた灰の堆積があり、前身の建物が一度火災に会っていたことがわかった。その土を除去してみると前身の民家の跡がみられた。Ａトレンチ北端からＢ１トレンチ北部にかけて庭踏石が南北に並んで残っており、またＢ１トレンチ北側から雨水受けのカメも出土した。

その建物の建っていた地盤をさらに約10cm掘り下げると赤褐色の安定した土層が検出された。Ａトレンチ西半分の盛土の下には帯状に焼炭を含む山砂状の土層があり、中から硝子や桟瓦等が出土した。この土層は深さが55cm以上続いており、埋土を除去すると南北に通る溝の東岸が現われた。東半分は西側よりは比較的安定した土層であり桟瓦や陶器の小片が多数出土した。この埋土を除去すると赤褐色の地山面が現われ、この段階でも西側に検出された溝は深く続いていた。南側の地山層の崩れた土で埋った部分は埋土を除去すると深さ14cmの溝になった。また北端中央の土の柔い部分は西側の溝によって大半を切られた形になって深さ20cmの穴になった。

Ｂ１トレンチの西側は以前に建っていた民家の庭部分であったために砂質土で整地されていて、庭踏石が南北に並んで残っていた。この庭土の下は赤味を帯びた厚さ50cmの柔い土層であって壺が一個出土したほかは他の遺物は少なかった。この埋土を除去するとＡトレンチ西側に検出された溝に連続する南北方向の溝の東岸が検出された。深さと西岸の位置についてはトレンチを拡張することができないために確認することができなかった。

東側では厚さ10～20cmの焼炭層がＢ２トレンチにかけて埋っており、掘り下げるとＡトレンチと同質の地山面が現れた。東端部分には黄味を帯びた土層が南北方向に埋っており、この位置から地山面がいくぶん下ることがわかる。北端の汚れた土で埋った部分からは新しい桟瓦が出土し、埋土を除去すると深さ18cm 径250cm程度の穴の半分が検出された。この穴は後世のゴミ捨場であろうと推測される。中央部の砂礫土で埋っている部分を掘ってみるとゆるやかなＶ字形の穴になったけれどもこれは建築物とは無関係であるように思える。このＶ字形の穴の東側に隣接した汚れた土で埋った部分からは陶器片がいくらか出土し、汚土を除去すると深さ15cm 幅160×80cmの東西に長い隅丸方形の穴になった。これは後世に攪乱されたものであろうと思われる。また南側にも汚れた土が埋った部分があって、それを除去した後は深さ13cm径15cmの穴が検出されたが、これと対になって建物を構成するような穴は近くには見あたらなかった。

Ｂ２トレンチはＢ１トレンチ東端から続く焼炭層で覆われていた。それを除去すると踏み固められたような堅い土層が現われその上面には礫が広がっていた。Ｂ１トレンチの状況から察してさらに掘り下げてみると赤色の地山面が現われた。西側に黄味を帯びた礫混じりの土層が南北方向に通っていて中からは瓦片や陶器片が出土した。さらに掘り下げると大きな礫が出てきて深さ160cmで底部に達した。ただしこの部分はかなり深いために北側半分だけを掘って確めた。底部付辺には遺物は少なく、掘られてからすぐに埋戻されたのであろうと思われる。この結果 深さ160cm 幅200cmの南北に通る溝であることがわかった。この溝の東岸は75度くらいの急勾配にけずられていて人工的に掘られた溝であることを示している。

東側半分の土層はかなり攪乱された状態であった。西側に検出された溝の東岸に接して深さ49cm幅120×70cmの方形状の段がついており、段の切り込みは深く、溝の場合と同質の埋土で埋っていたものである。これは溝に関連した何かの装置である可能性が考えられる。この段から始まって紫色を帯びた土層が東へ延びており中からは須恵器片が出土した。掘ってみると深さ15cm幅71cmのV字形の溝になり、さらに東へ延びてB3トレンチ北側に検出される溝に連続していることがわかった。このV字形溝は遺物から察して古墳時代の遺跡であると考えられる。中央の砂質土で埋った部分からは桟瓦片や陶器片、土器片、すり鉢の破片が多量に出土したが、これらは全て新しい時代の遺物であった。掘り下げた結果深さ45cm径170cmの円形穴になり、これは近世のゴミ捨場であると思われる。北側に検出された深さ9cm径40×60cmの楕円形状の穴は礎石のあった可能性が考えられるけれども、これと対になる穴が付近にないためにその性格は明らかでない。その南下側に検出された深さ10cm径15～20cmの2個の穴についても同様に性格がはっきりしなかった。また中央部の大きな穴の南側に接している深さ8cm径95cmの半円形状の段とその東方に検出された深さ15cm径75cmのすり鉢状の穴についても性格は明確ではない。

B3トレンチにおいて赤色の地山面まで掘り下げてみると柱または杭を立てたと思われる穴が南半分に7個検出された。これらの穴はCトレンチ南側に集中して検出される穴群と連続しており、個数は合計22個である。これらの穴の形状は深さ10～28cm径14～25cmの円形である。北側には古墳時代のV字形溝がB2トレンチから連続して東西方向に通っている。南側の埋土の中から土釜が出土しており、この埋土は鎌倉時代に埋められた溝の跡であると考えられるけれどもその性格は明確でない。またトレンチ南壁で赤色土が高くなっているのが認められた。それによって南壁の外の方に土塁のあった可能性が考えられる。

Cトレンチの表土は20～50cmの厚さであり、保育所の庭部分であったためによく踏固められていた。北端の物置小屋の前方には砂場があった。表土の下にはB2トレンチにあったような焼炭層はなく、攪乱層が深さ40～80cmまで続いていた。中央部から南部にかけてトレンチの東側に深さ80cm幅160cmの攪乱層が続いており、掘り下げてみると南北の端に入口があり南北にまっすぐ通る壕になった。この壕は、庭に近い部分からセルロイド製の櫛やコンクリートの破片が出土したために戦時中に使用された防空壕の跡であると思われる。またその底部に径120cmの井戸が検出された。内部には拳大の礫で埋っており、これは近世の井戸跡ではないかと思われる。深さ137cmまで掘ってみたが、ガス発生等の危険がありそれに対する十分な設備がなかったためそれ以上掘り下げることを断念した。壕の南端からトレンチ南端付近には地山面が平坦に続いていてB3トレンチでみられたのと同様な穴が14個集中して検出された。壕の西側では地山面がほぼ平坦に南北に続いており、その中央部に溝状に攪乱された部分があった。トレンチの中央付近には特に建築物の遺構であると思えるような明確な形跡は見当らなかった。この部分は地山上に赤味がかった土が全体を覆っていて、東西基準線から23cmあたりの地点では古墳時代の遺物と思われる完形の坏が一枚出土した。

トレンチ北側に径94cmの井戸状の穴が検出された。内壁は円形状でほとんど垂直に切り立ってお

り、内部は固い埋土で埋っていて土器小片等が出土した。深さ 115cmまで掘り下げてみたがこれ以上掘ることは危険であると判断し作業を中止した。北端の25cm地点から東西方向を岸にして地山面が急激に落込んでいるのがわかった。これは石炭ガラで埋っていたものであり、出土する遺物は近代のものばかりであった。深さ75cmまでは切り立っていることが確認でき、さらに深くまで続いていると思われるが、それ以上掘り下げると崩れ落ちる危検がみられるので作業を中止した。この落込みの東西方向の岸は空堀の南岸であると推定される。この空堀の南岸に接して南側に楕円形状の穴が検出された。埋土の上部は山砂状の土であり、 100cm以上の深さになると焼炭を含む土になって土器片、大きなカメの破片、すり鉢や土釜や茶臼の破片、また磁器片がいくらか出土した。 160cmの深さから底部はフラスコ状の形状になり、 220cmで底面が現われた。遺物の数は底部に近くなるほど少くなった。北側の壁が途中まで崩れているのは恐らく空堀の岸が崩れてきたためであろうと思われる。この穴は比較的古い時期の遺跡であり、荒木村重の時代に使用されていた可能性が強いように思われる。

## 2． 西郭

西郭調査区域は南郭区域と道路一本を隔てた北側にあり、その東側は崖、北側は荒村寺の塀、西側は民家によって区域を限られている。この区域は旧有岡乳児保育所の敷地であって、それ以前は公会堂が建てられていた。

調査は道路予定線から東側を発掘することにした。深さ60cm程度の試掘を行った結果その深さまでは挙大の礫層で厚く覆われていることがわかったため、ブルドーザーを用いてこの礫層を除去し区域の西側に排土を積み上げた。礫層を除去した後は南部と同程度のレベルで地山面が現われてきたのでそれ以後は手掘りによって調査を続けた。

発掘の結果、調査区域の南側には東西に走る大きな堀の北岸が現われた。この空堀の南側は南郭区域の北端部に検出されている。空堀の内側は砂礫を含んだ埋土が詰まっており、手掘で深さ 2m ぐらいまで掘り下げたところ、埋土の中央部からは近代の遺物が出土したため、土層図を採ったうえで、ブルドーザーを使って排土を行い、深さ 2m 以降は再度手ぼりで調査を行なった。砂礫層から成る埋土は、すべて南に下りに流れこみ、出土する遺物からみて、明治以降も堀が残り、流土によつてだんだんと埋っていった様子がよくわかった。

堀の壁面は深さ 1.8m ぐらいで傾斜が変り、上部は傾斜が緩く永い間露出していたものと思われる。下部は地山面に75度ぐらいの角度で切り込んでおり、石垣などの設備が施されていた形跡は認められない。底部に近づくと埋土は砂質になり、薄い腐蝕土層の下から地山面が検出された。この地山面は0．5m 南で段形に低くなっている。底面近くでもあまり遺物の出土はみられなかった。

堀の北側は 0.6m 厚の礫層で覆われていたが、これは公会堂を建設する時の地業であったと思われる。この礫層の下に攪乱層があるが、堀に近い南側では薄く、北へ行くに従って深くなっている。

また、荒村寺近くでは、かなりの厚さの焼炭を含んだ層が見られた。これらの撹乱層の下からは、東部では生活面をなしていたと思われる砂層が検出されたが、西側の大部分では、この層は失わている。この砂層に合せて、皿状の掘窪みが２カ所検出され、トレンチの北端近くでは、整地層に喰込んで粘土質の地業らしいものがみられる。これらの痕跡は礎石を使った建物の可能性が強い。

つぎに、空堀の肩には、これらの砂層の上に築かれた形で、赤褐色の山砂が土塁状に積まれていた。この築土層はＷ３ぐらいの点で消滅しているが、それより西にも築土されたと思われる痕跡は残っており、空堀の内側に築かれた土塁であると考えられる。

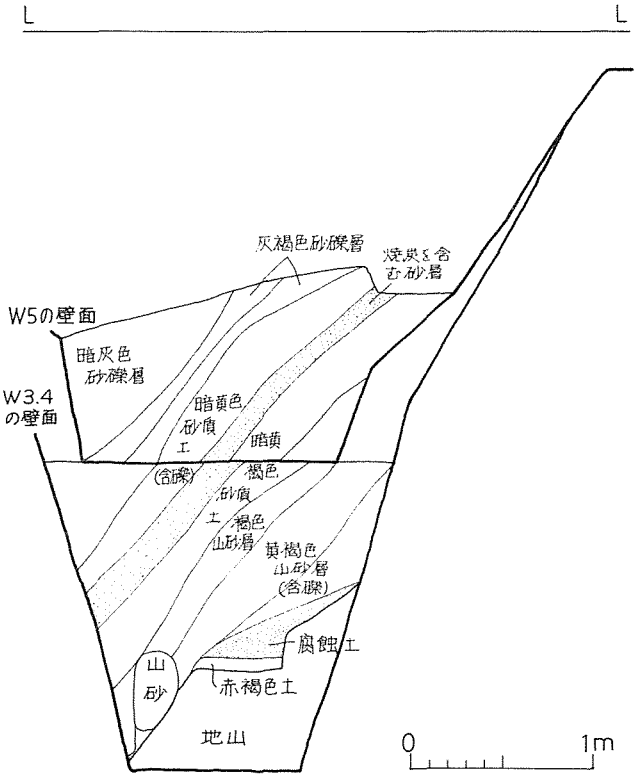
砂層の下には、土器片を含む茶褐色の整地層が全面に広がっている。この整地層の上面からは、多数の小穴が検出された。そのうち、７個の小穴が、２m 間隔で並び、３間×２間の掘立柱建物であったと思われる。

茶褐色の整地層は30cmぐらいの厚さで北部全体を覆つている。この層の中には中世のものと思わる土器や磁器片を含んでいる。この整地層を除去した下は地山面で、南北方向にゆるい起伏を持つた溝と窪みが通っている。地山面からは多数の小穴が検出されたが、一直線上にのるものは二条だけで、間隔もばらばらなため、建物に関係したものではないものと思われる。

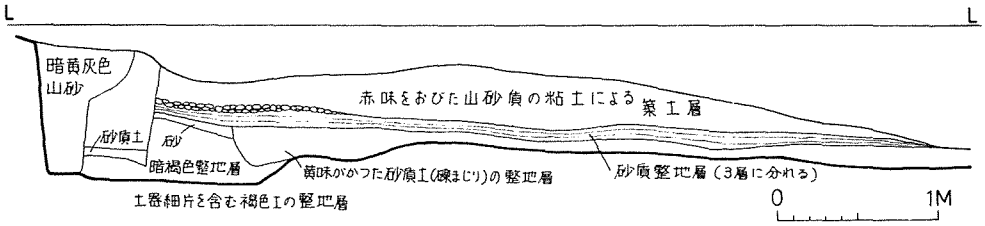
# Ⅳ　遺構の考察

## １．　遺構の概要

今回調査した場所は、伊丹城の西側南半にあたるところで、本丸や天守台など、城の中郭部から一番離れたところにあたる。その南郭と西郭の、またごく一部にトレンチを設定したのであるが、そこから検出された主な遺構は堀３条、土塁１条、礎石建物１棟、掘立柱建物１棟、柵２列、井戸１．貯蔵穴１であった。これらのうち、南郭にあるものは堀２条､井戸１、貯蔵穴１で、西郭には土塁１、建物３、柵２になっている。間を幅17.5m 、深さ 3.6m の空堀で区切られる南郭と西郭の地盤面はほ




挿図１　　空堀埋土土層図




挿図2　　土墨土層図

とんど同じ高さである。その地盤面に、西郭では三層の生活面が残っており、有岡城時代、伊丹城時代、伊丹氏の居館時代に見合うものと思われるが、南郭では攪乱が激しいためもあって、そのような生活面はみられない。ただし、南郭では雑多な遺物包含層のすぐ下から、古墳時代の溝や盛土が検出されており、西郭にはそれに該当するものがないので、この両区郭は城郭が築かれる以前は用途が違っていた可能性が強い。

## 2. 空　堀

今回の調査で検出した空堀のうち、主なものは西郭と南郭の間にある東西の堀で、南北両岸の肩で17.5m、深さは 3.6m もある巨大なものである。部分的に検出した北岸は、素掘ではあるが75度ぐらいの傾斜があり、直上に土墨を築いている。底面の角には斜めに腐蝕土の堆積があり、そこから先は段形に底が下っていて、何回か壁面を削り直したようである。

空堀の北壁の上には、土墨の基底部が残っている。残存する基底は幅1m ぐらいであるが、堀側がかなり崩れているため、正確な幅はわからない。築土は地山の土と同質で、残存する部分は礎石建物があった当時の生活面であったと思われる砂礫層の上に乗っている。基底部の状況からみて、土墨の高さは 1.5～2m ぐらいあり、空堀と組み合わさって、有効な防御施設になっていたものと思われる。この空堀は、恐らく、西側の堀の内側から、まっすぐに東へ延び、忠魂碑を巻くような形で南東へ流れ、城の西郭を独立させたものと思われる。

空堀は南郭でも南北に通るものが2本検出された。1本は幅 2.7m、深さ 1.6m のもので、両岸は切立ったように急激に掘込まれている。他の1本は、この堀から約4m 西に平行して通されたものであり、東岸だけが確かめられている。この2本の空堀は、すぐ南で南堀と交わるはずであるが、その取合せ部分がどのようになっているかは確認できなかった。

## 2. 貯蔵穴

南郭の北端からは、長径 1.8m 深さ 3.5m の楕円形の穴が検出された。この穴から出土する遺物は比較的古く、大きな壺の破片やすり鉢、土釜、茶臼などの破片が、焼灰にまざって詰まっていた。底部はフラスコ状にふくらみ、遺物の量も少なくなる。恐らく村重時代に使われた貯蔵用の穴であると思われるが、穴の上部を覆うような建物は発見されなかった。

## 3. 西　郭

西郭の構成については、三つの時期が考えられる。一つの時期は空堀の内側に高さ2m ぐらいの

土塁が築かれ、それに接するようにして梁間 5.5m 、桁行 6m 以上の礎石建物が建てられていた時期である。この時期は一番新しいものであるから、荒木村重の有岡城時代に当るのであろう。

つぎの時期は柱間 2m の 3 間×2 間の掘立柱建物が建っていた時期である。この時期の遺構は、先の礎石建物のすぐ下に見られるので、時期的なへだたりはあまりなく、伊丹氏の居城時代の遺跡と考えられる。最後に最下層の遺跡は、間の整地層の中世遺物を含んでいるので、かなり古い時期まで遡り、恐らく、伊丹氏の居城時代のものと思われる。

**4. まとめ**

伊丹城跡第 1 次発掘調査は、小規模なものであって、今後の調査の手掛りを得られた程度の成果しかあげ得なかった。その中で、おぼろ気ながら見透される伊丹城の姿や特徴を列挙すればつぎのようになる。

（1）伊丹城は段丘上の平坦な土地に堀をほり、その土を土塁として盛りあげて、地面に凹凸をつけ、防備を固めた城である。それゆえ、大小の空堀の取合せに注意を払う必要がある。

（2）南郭の周囲は深い堀で取り巻かれており、独立した構えを構成していた。

（3）南郭の下層からは古墳時代の須恵器が出土しており、この近辺には古墳時代の集落跡があることが推定される。

（4）西郭の建物跡などは粗末なものであり、主要部分から離れた場所であると推測される。

# V　遺物の考察

今回の発掘調査地域からの出土品は、古墳時代の須恵器、中世の土師質土器、陶磁器、緑釉陶器、石製品が地山面、整地層より遺構をともなって認められ、近世の陶器、瓦類、古銭が撹乱層より出土している。

これらの遺物のうち、古墳時代、中世と思われるものの一部を以下に概括した。

**1. 須恵器**

坏身（図面7の1）口縁部の立ちあがりはやや内傾し、高さ 1.9cmを測り、端部は鋭い。受部は水平で先端は丸味をもっている。体部から底部にかけての器表は幅のせまいヘラ削りがみられ、底部は扁平である。口径11cm、器高46cmである。

坏蓋　口縁部はわずかに外反し、端部は鋭い。体部は幅のせまいヘラ削りがみられる。

甕　口縁部は外反し、先端部は鋭い稜をもち、肩部のよく張った大形の甕で、器表は平行叩き目文を残す。

器台　縦に直線的に並ぶ方形の透しがみられる脚部の小破片である。

これらの須恵器は、坏蓋と身がC－8地区の地山面凹地よりセットで出土した。甕、器台はC－1地区の溝状遺構内より出土した。これらの遺物は、坏身の完形品以外は小破片であった。坏蓋、

坏身の時期は陶邑 ＴＫ 208平行と思われる。甕、器台の時期は ＴＫ 208より少し下るものと思われる。

**2．土師質土器。瓦質土器**

瓦器椀（図面7の２・３） ２は口径15.4cmを測り、内外面ともに明灰色を呈し、焼成良好な椀で、高台は器面の研磨後につけられている。３は口径15.6cmを測り、内面はていねいに研磨されている。外面の体部下半に指先での整形痕がみとめられる。

これらの瓦器椀は、堀の北側整地層内と地山面の柱穴跡から、小破片として多くみとめられた。地山面と整地層での出土品からは、時期差を明確にみい出す事は出来なかった。

小皿（図面７の5・6、図面８の1～6） これらの小皿は口径10cm内、器高２cm内で、体部から口縁部はゆるやかに立ちあがり、器面には横ナデがみられる。胎土は砂粒を含み、淡灰褐色ないしは灰黄色を呈す。図面8の6は、器面下半部で指先での整形痕がみられる。

椀（図面7の10～12）これらは口径12cm内、器高６cmぐらいで、体部から口縁部にかけて鋭く立ち上がり、器面には横ナデがみられる。胎土は砂粒を含み、淡灰色ないしは灰黄色を呈す。焼成は他の土師質土器より良好である。

坏（図面８の7～9） これらは口径15cm内、器高３～４cmぐらいで、体部から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がり、口縁部はやや丸みをおびる。器面には横ナデがみられる。胎土は砂粒を含み、淡灰色ないしは淡褐色を呈す。図面8の7は、口縁部でゆるやかな段を呈する。

大坏（図面8の10～12）これらは口径22cm内、器高４～５cmぐらいで、体部から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がり、口縁部は丸みをおびるのと鋭いのと２種類が認められる。器面には横ナデがみられる。胎土は砂粒を含み、淡灰色ないしは灰黄色を呈す。

土釜（図面９の2・3） ２は口径18cmを測り、口縁部に段を有しない土釜である。３は口径28cmを測り、口縁部に段を有する土釜である。段を有する土釜は他の破片でも比較的口径の大きなものにみとめられる。

香炉　２点出土している。１点は、器表に灰緑色の釉がみられ、スタンプ状のもので円形紋様がえがかれている。他の１点は、焼成もやわらかく、器表は淡褐色を呈する。スタンプ状のもので渦状の紋様がえがかれている。

これらの土師質土器、瓦質土器はＣ－９地区土坑状遺構、塚の北側整地層及び地山面で多く出土している。小皿、坏、大坏、椀は胎土、整形方法で大差はみとめられず、時期差はみとめられなかった。土釜は、段の有無では、時期差がみられなかった。香炉は、Ｃ－９地区土坑状遺構で２点とも出土した。

**3．陶磁器**

壺（図面９の１） 口径25cmで、頸部より口縁部にかけてゆるやかに立ち上がり、口縁部はケズリ出しの凸帯がみられ、焼成は堅い。内外面ともに暗褐色を呈す。

大壺　口縁部が鋭く外反する大形の壺で、耳が付いている。内外面ともに黒褐色を呈する。口縁

部から頸部にかけて、薄い黄色味おびた釉がみられる。胎土、焼成ともよい。

ねり鉢（図面９の4・5）　２個体とも須恵質のもので、灰白色を呈している。口縁部に黒褐色の釉を塗っている。

すり鉢　器表に粘土帯のあとが残り、その上に横ナデがみられる。内面に９本１組の沈線を底部より上部にはしり、摺鉢となっている。淡褐色を呈する。

青磁（図面７の7～9）　７は口径12.8㎝で、器表は沈線によって蓮弁紋が描かれている。８は口径14.6㎝で、器表に蓮弁紋が削り出されている。９は口径15㎝で、内面に沈線によって蓮弁紋が描かれている。これらの器面は暗緑色を呈すものが多い。

白磁　口径48㎝で、細い条線を縦に施すもので、釉のかかりは内面がていねいに、外面は全体の⅓程にみられる。これらの事より、当初は合子蓋と考えられたが、小皿と考えるようになった。

## ４．石製品

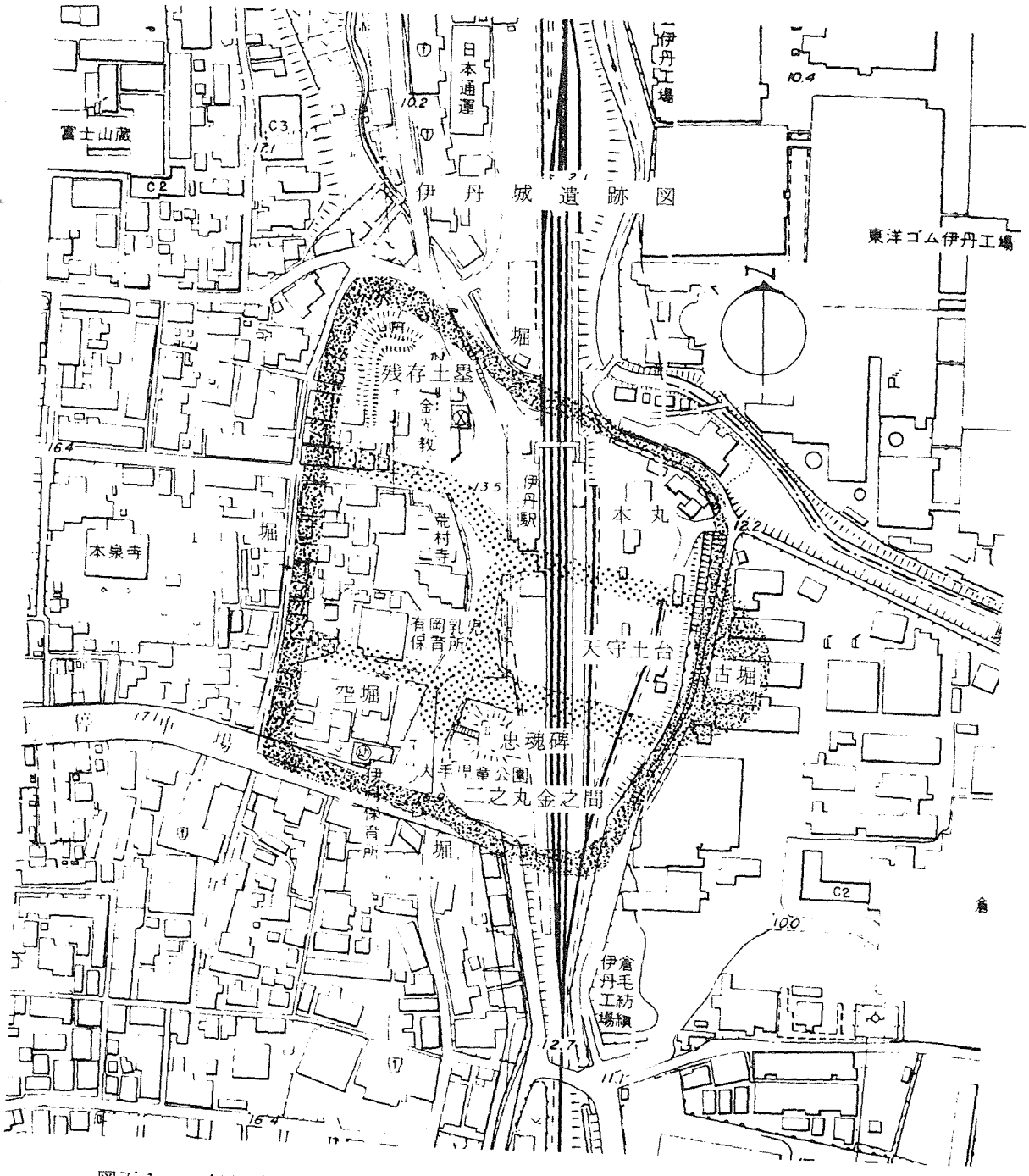
砥石　粘板岩の仕上げ砥石が２点出土している。

## ５．まとめ

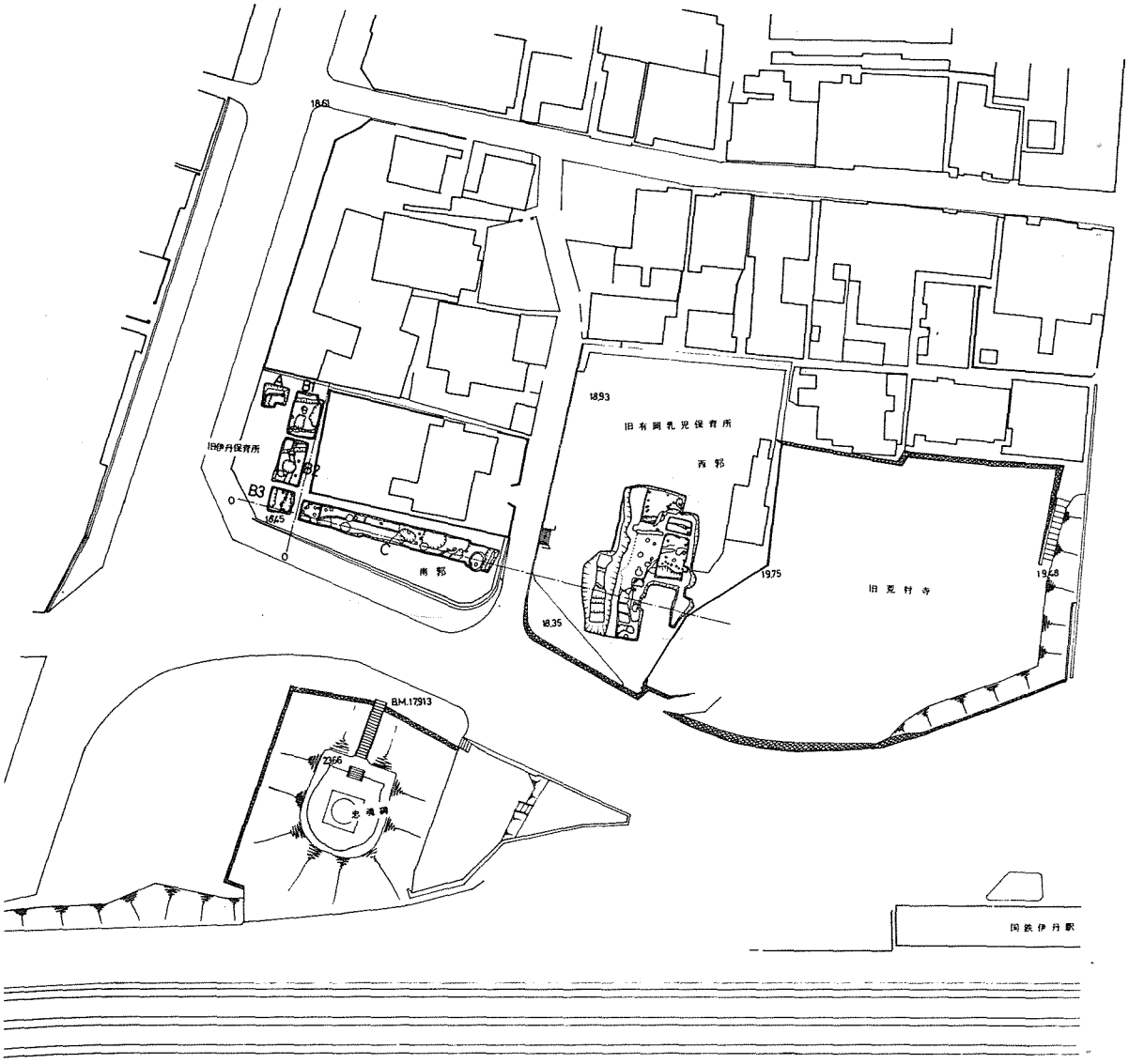
今回の整理、報告で気付いた点をのべて置く。

１．伊丹の丘陵上で古墳時代の遺構の存在が確認された。

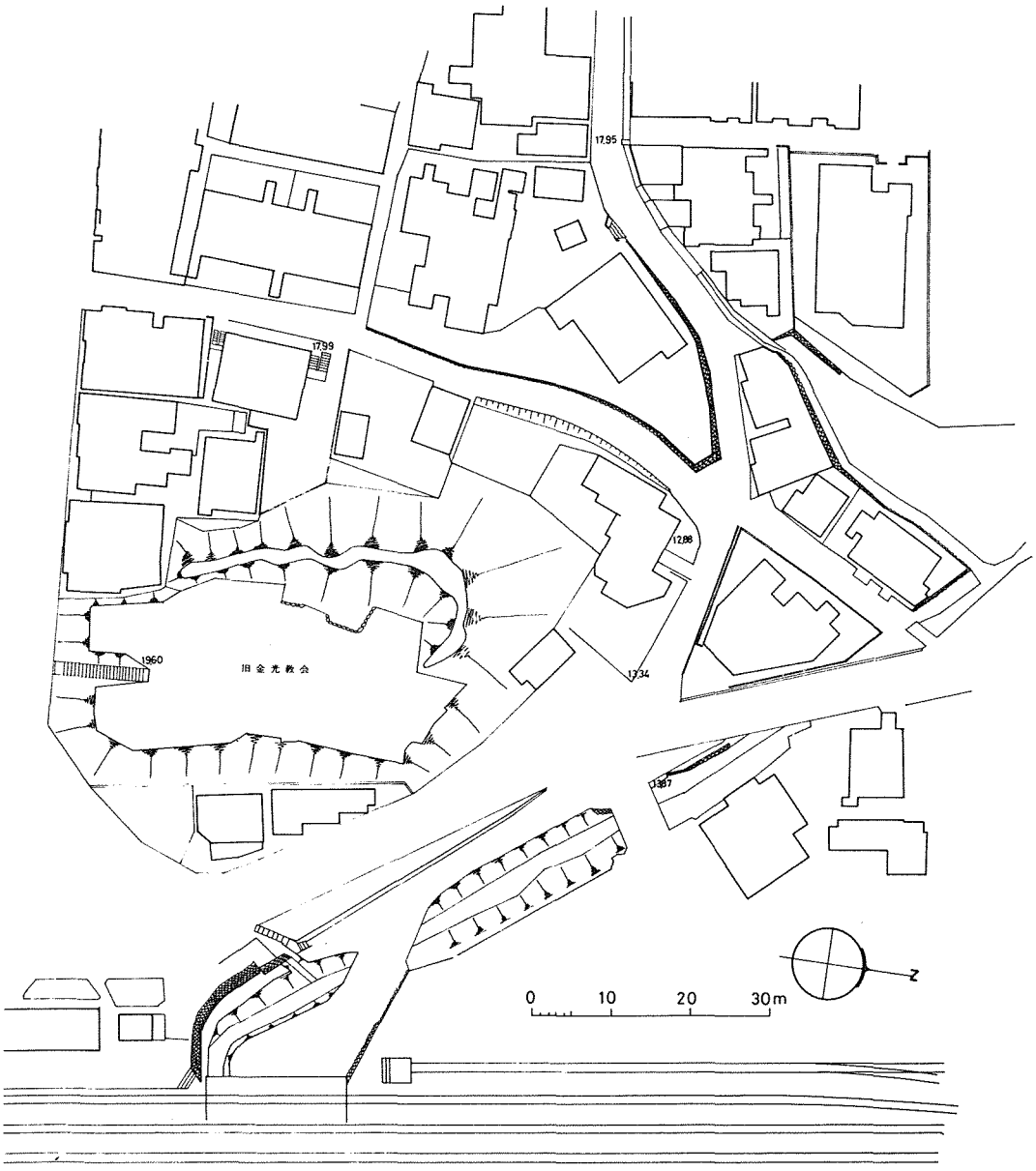
２．中世の城の関係遺物と周辺の町、村のその当時の遺物に、どのような差がみられるのかを、早く調査する必要があろう。

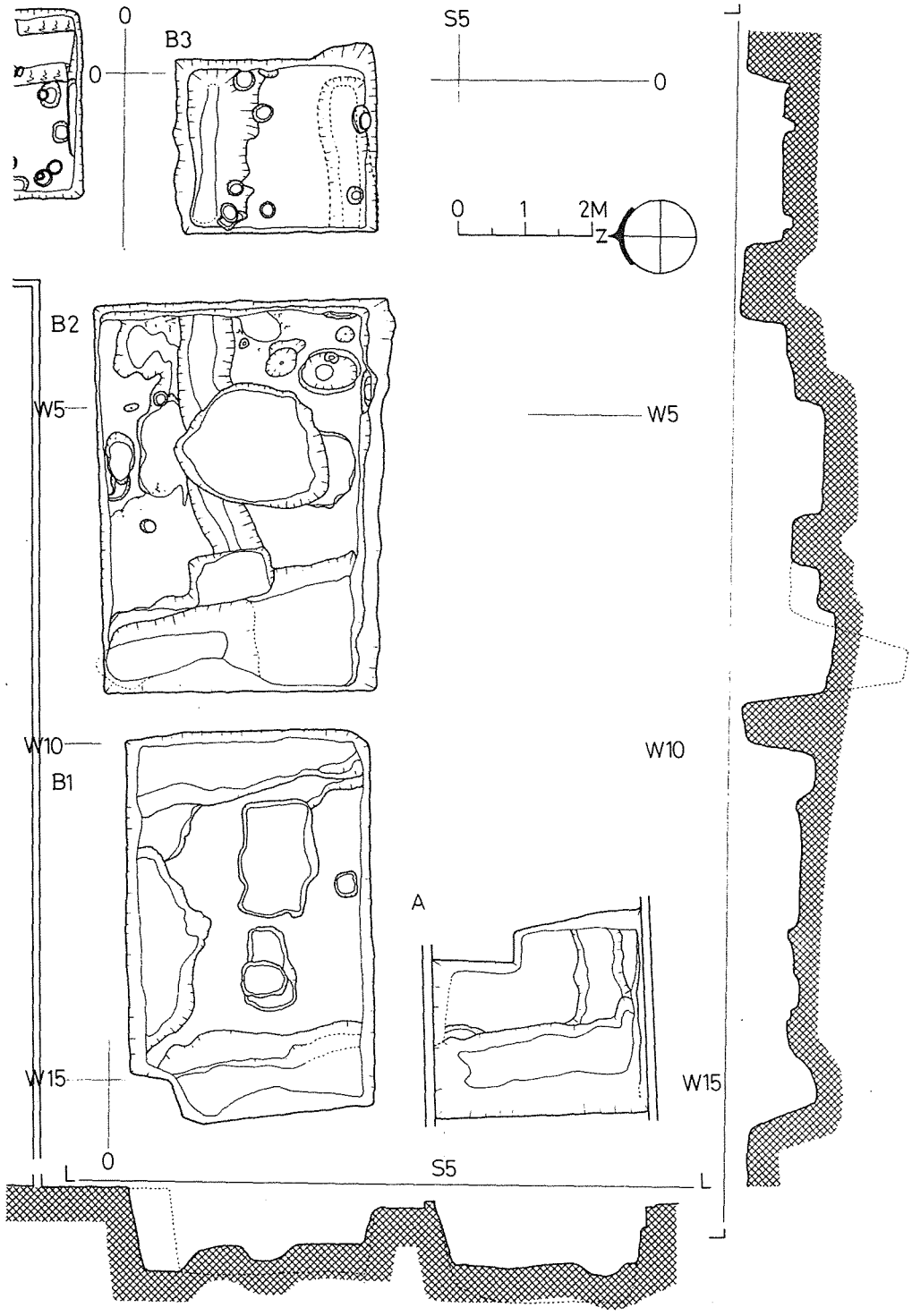



図面1　伊丹城跡推定図　縮尺$\frac{1}{2500}$

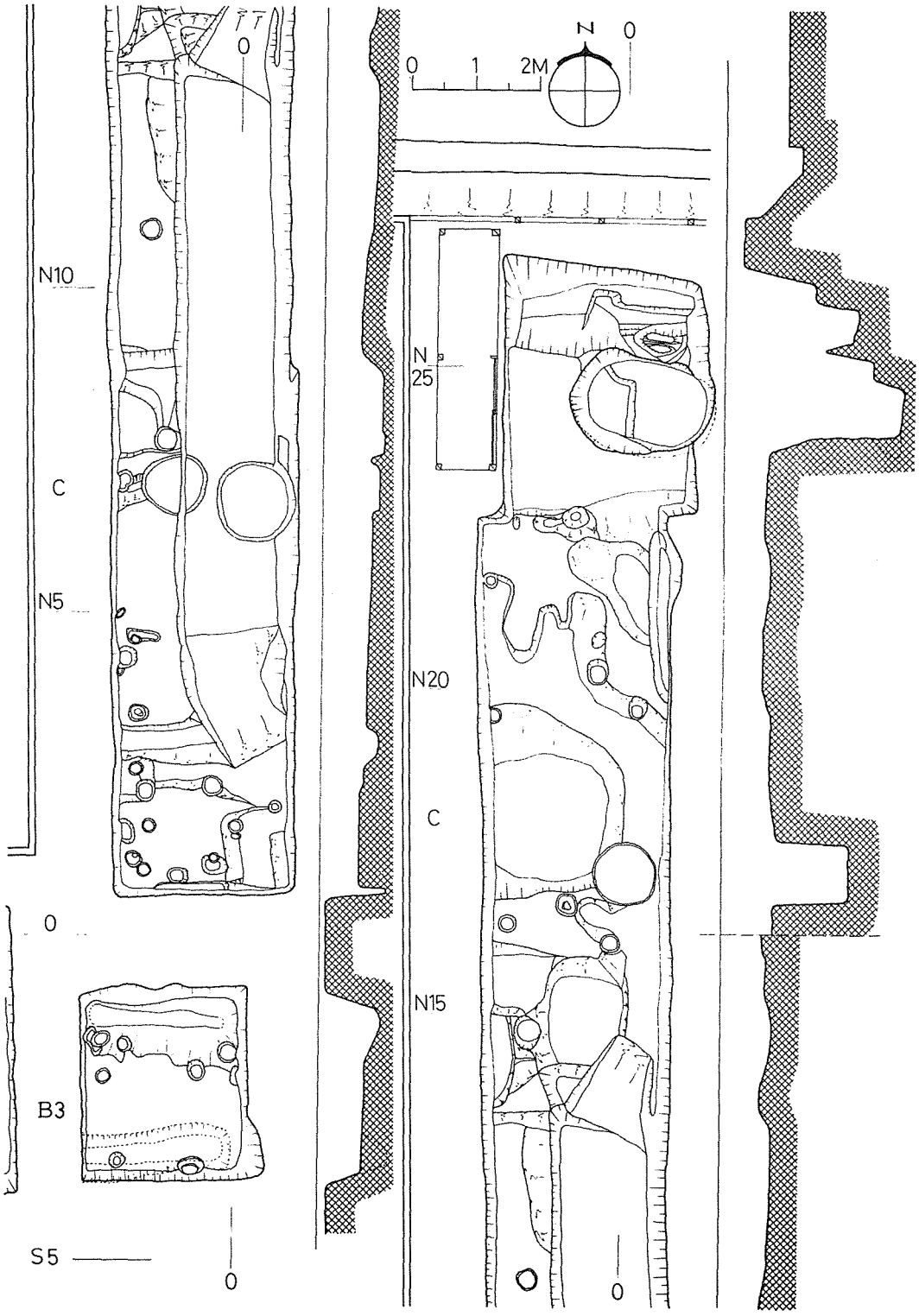

18.61
A
B1
B2
B3
旧伊丹保育所
18.45
南部
18.93
旧有岡乳児保育所
西部
19.75
18.35
旧荒村寺
19.48
B.M.17.913
23.66
忠魂碑
国鉄伊丹駅

図面２　　調査地区図

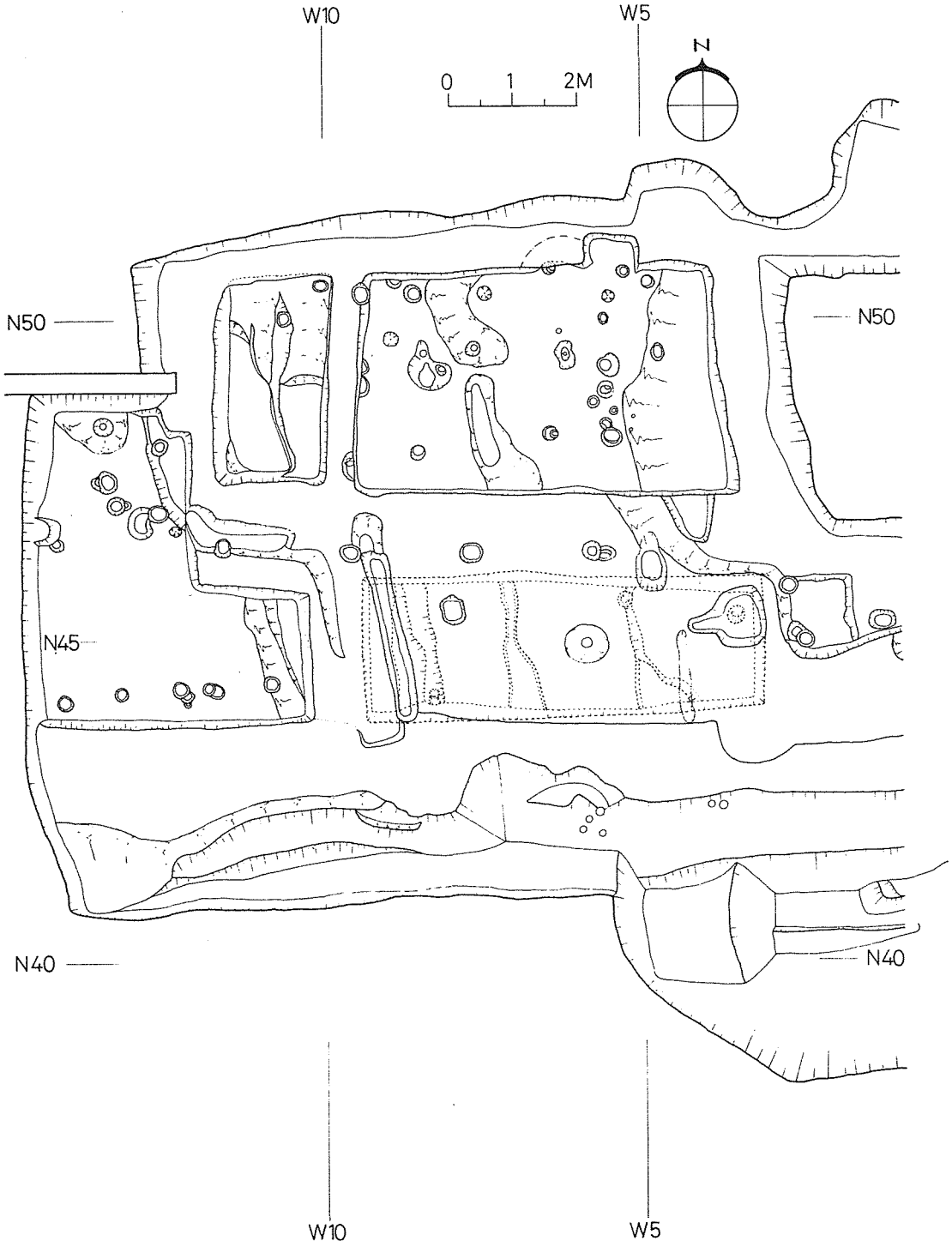

17.95
17.99
12.88
19.60
旧金光教会
13.34
13.87
0
10
20
30m
Z



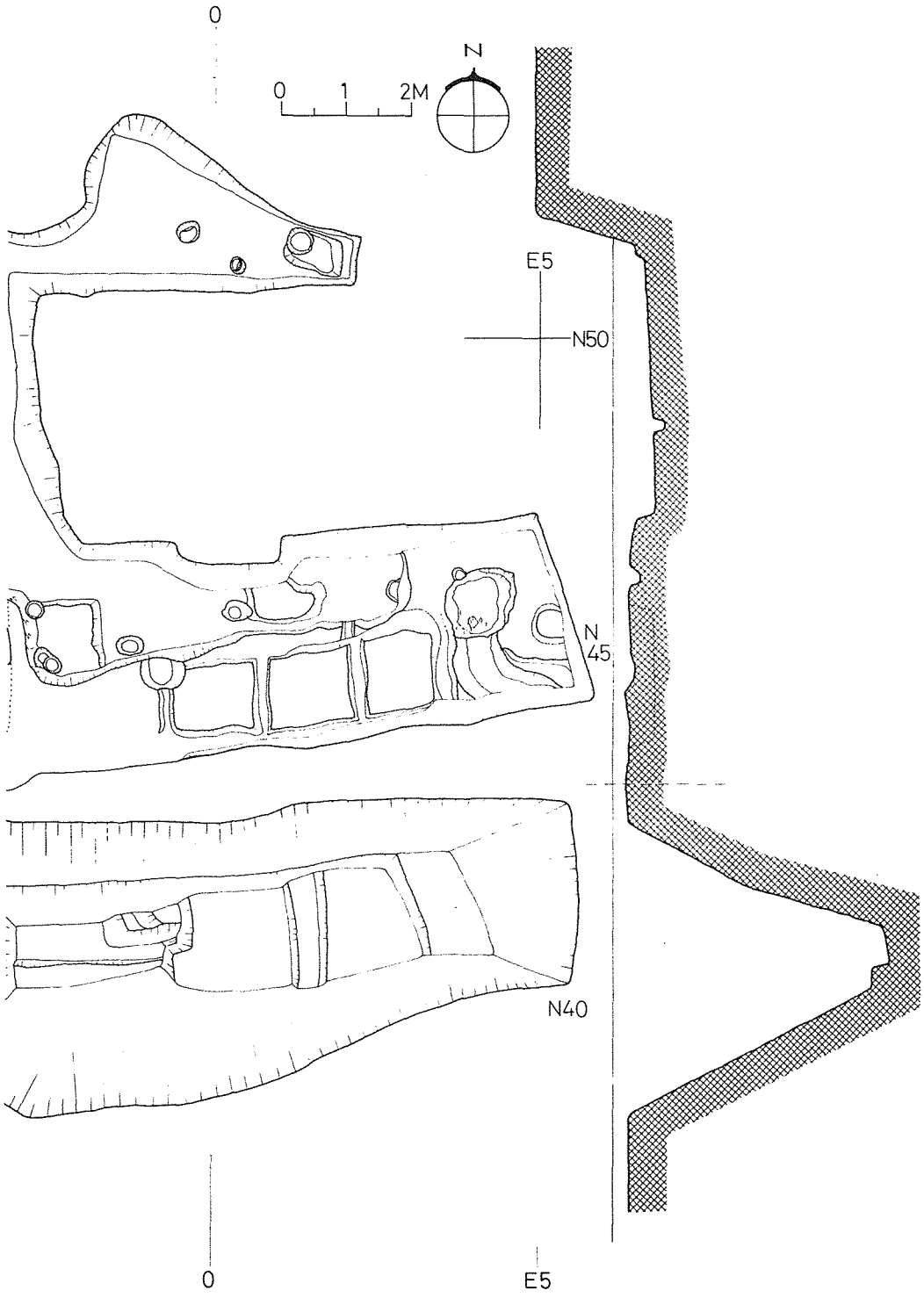

図面3　南郭南部　縮尺$\frac{1}{100}$



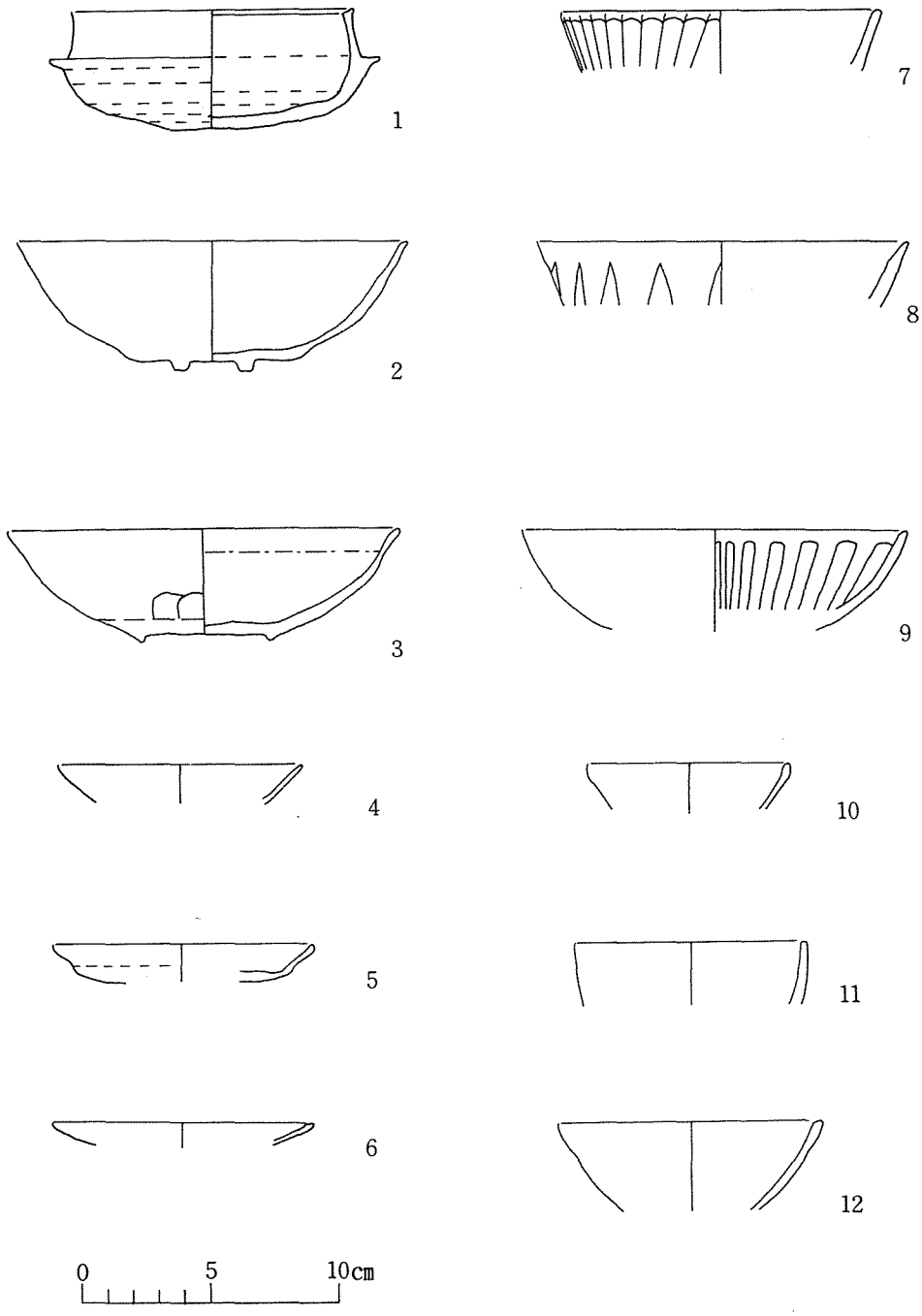

図面4　南郭北部　縮尺$\frac{1}{100}$



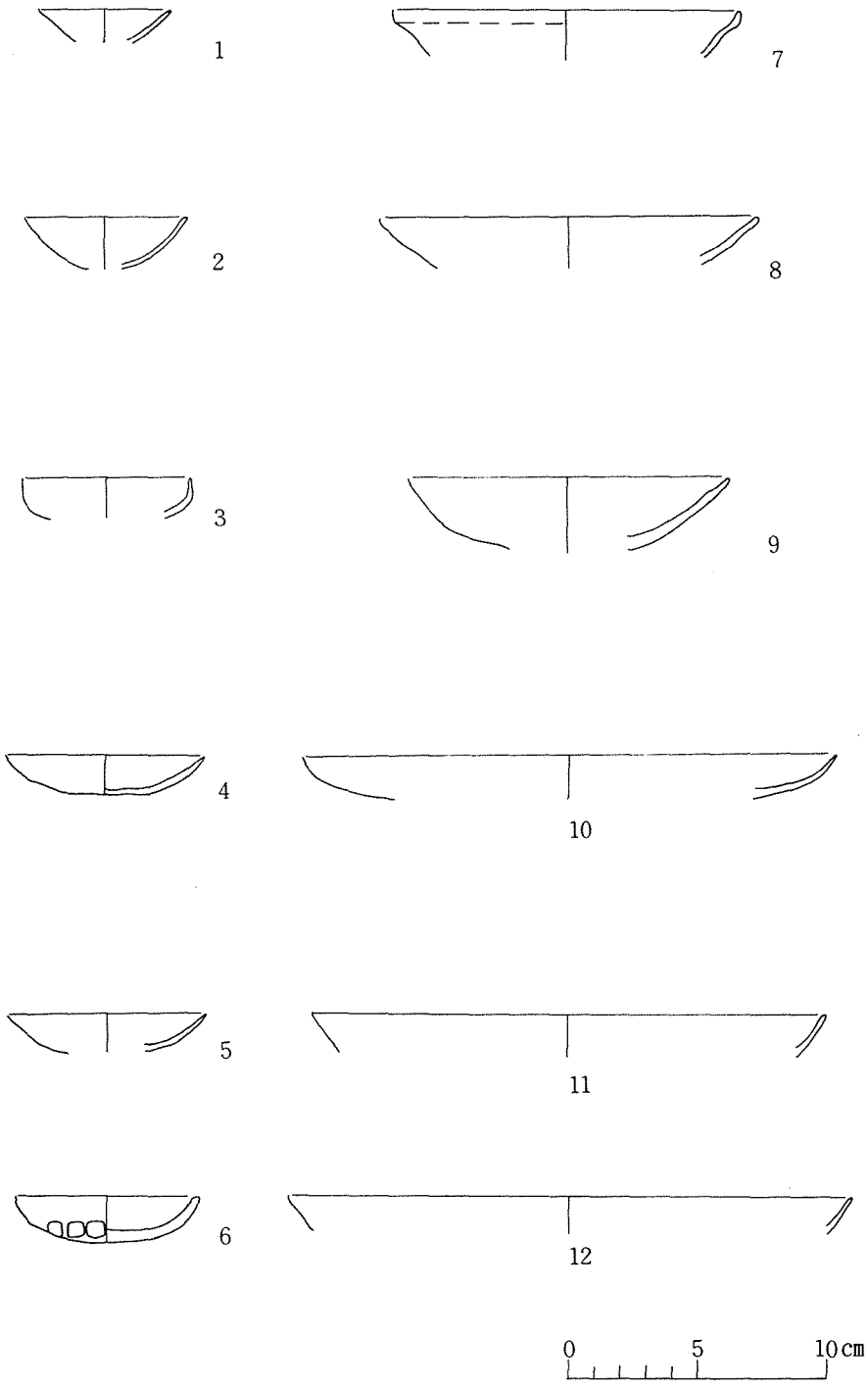

図面5　西郭西部　縮尺$\frac{1}{100}$



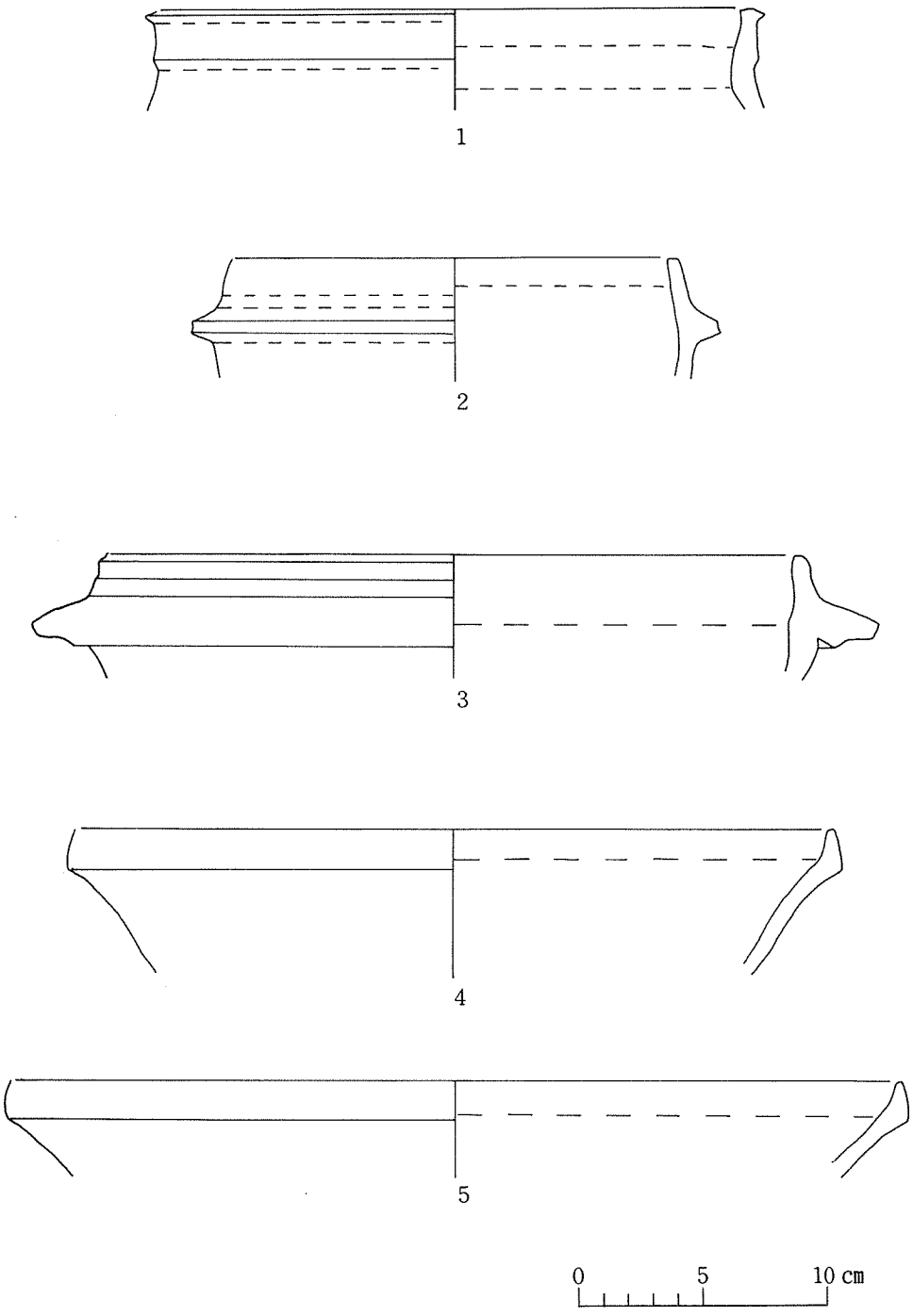

図面6　西郭東部　縮尺$\frac{1}{100}$




図面７　　須恵器・瓦質土器・土師質土器・磁器

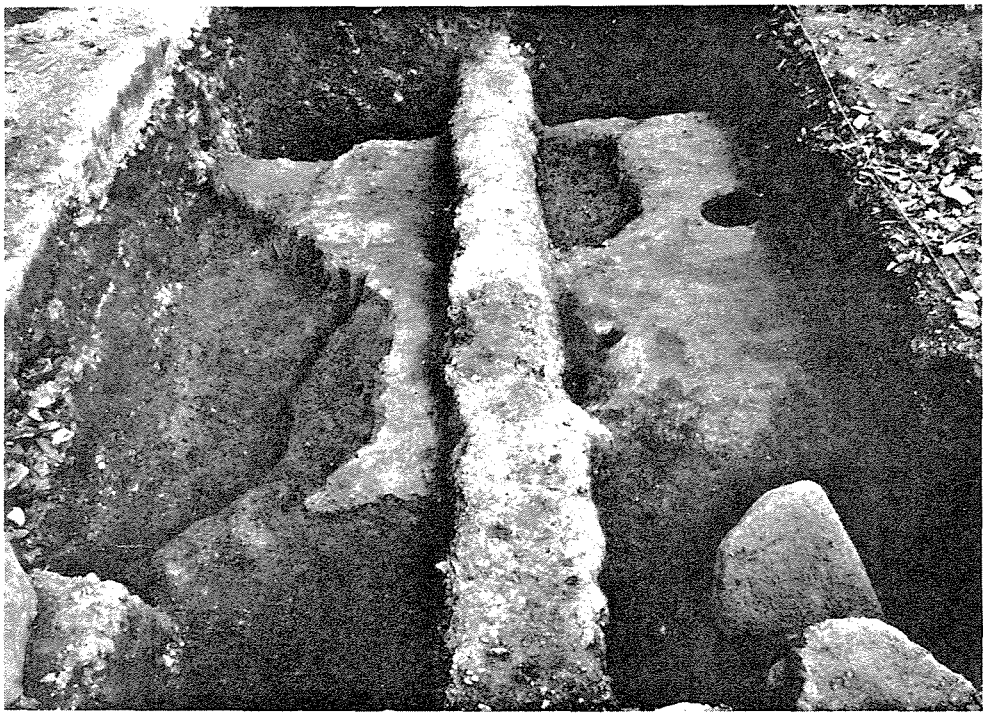



図面８　　土師質土器

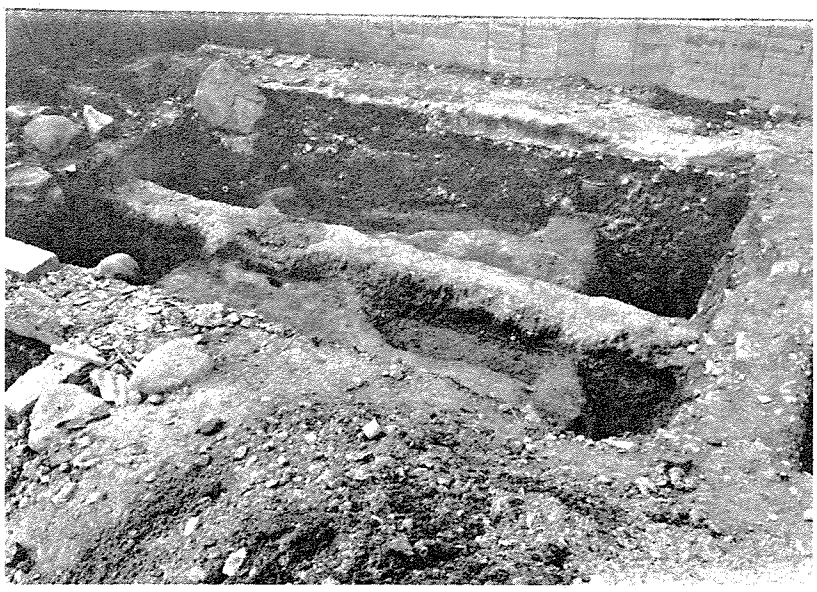



図面９　　陶 器

図版１　　南郭Ａトレンチ(北西から)



図版２　　南郭Ｂ１トレンチ(西から)

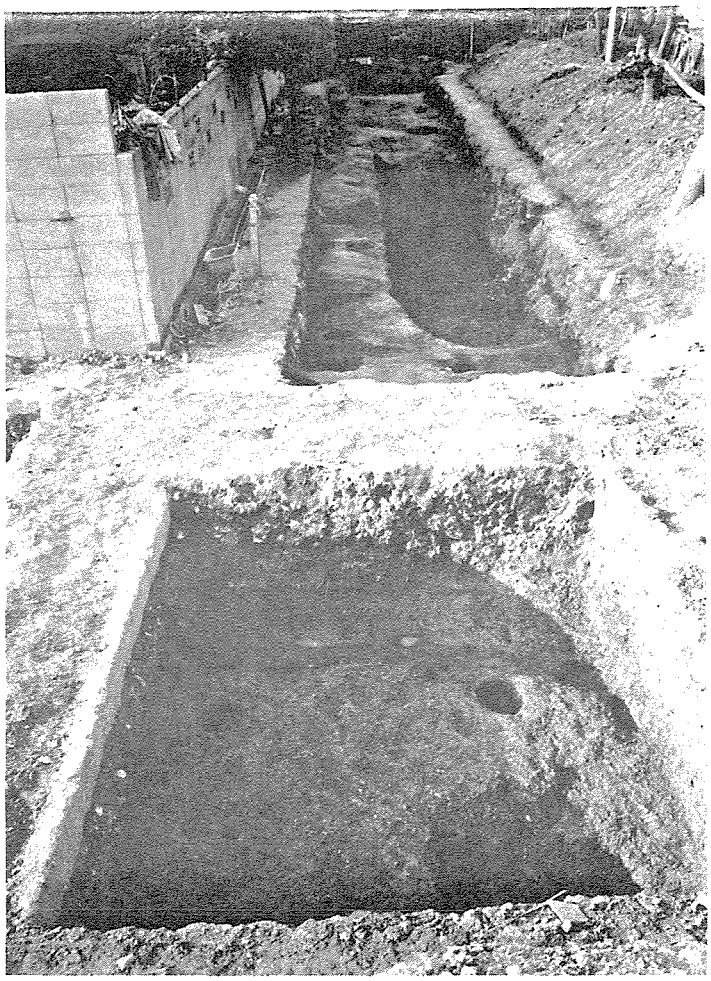


図版３
南郭Ｂ１トレンチ
（南から）

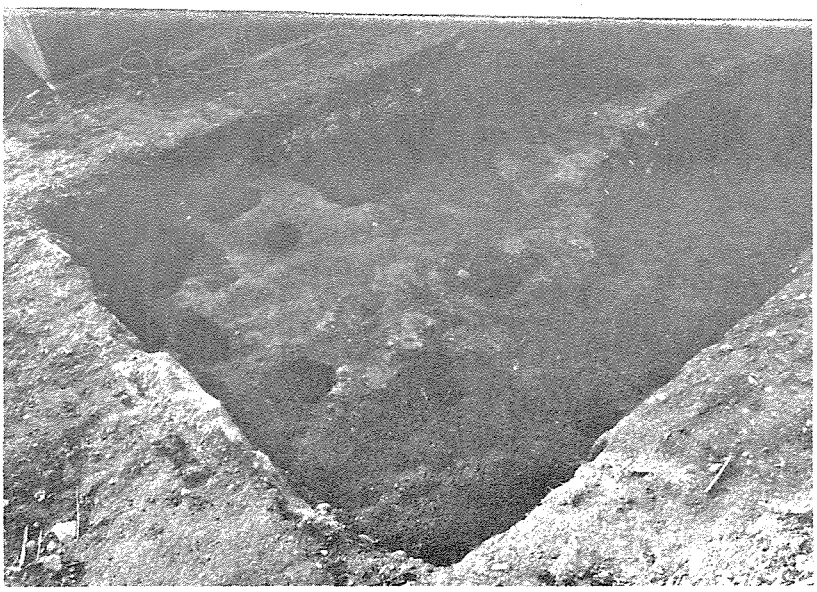
図版４
Ｂ１・Ｂ２トレンチ
間の空堀
（南から）

図版５
Ｂ２トレンチ
（南から）

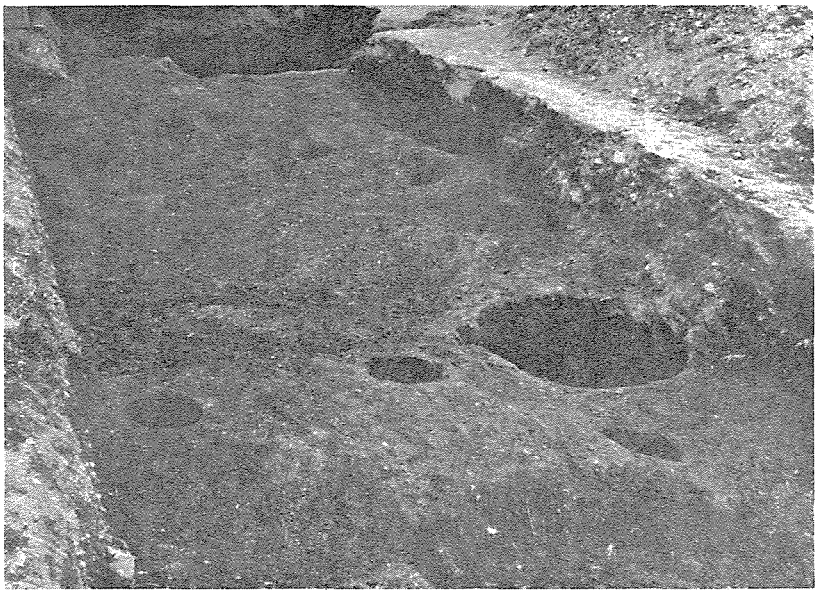
図版６
南郭Ｂ３・Ｃトレンチ
（南から）



図版７　　南郭Ｃトレンチ(北から)

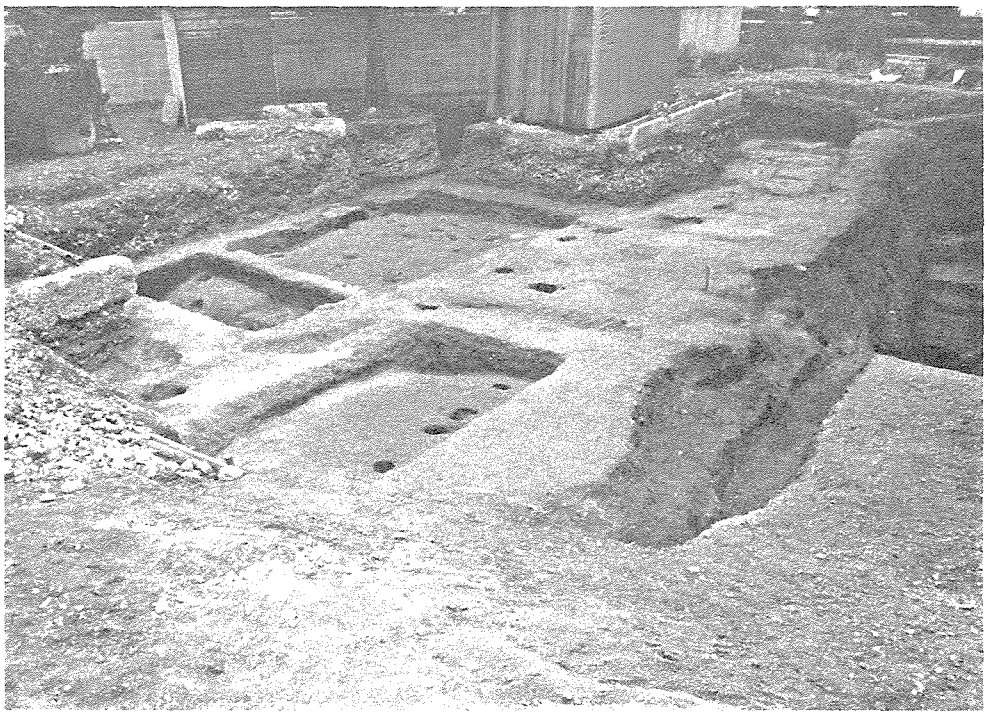


図版８
Ｃトレンチ南部
（南東から）

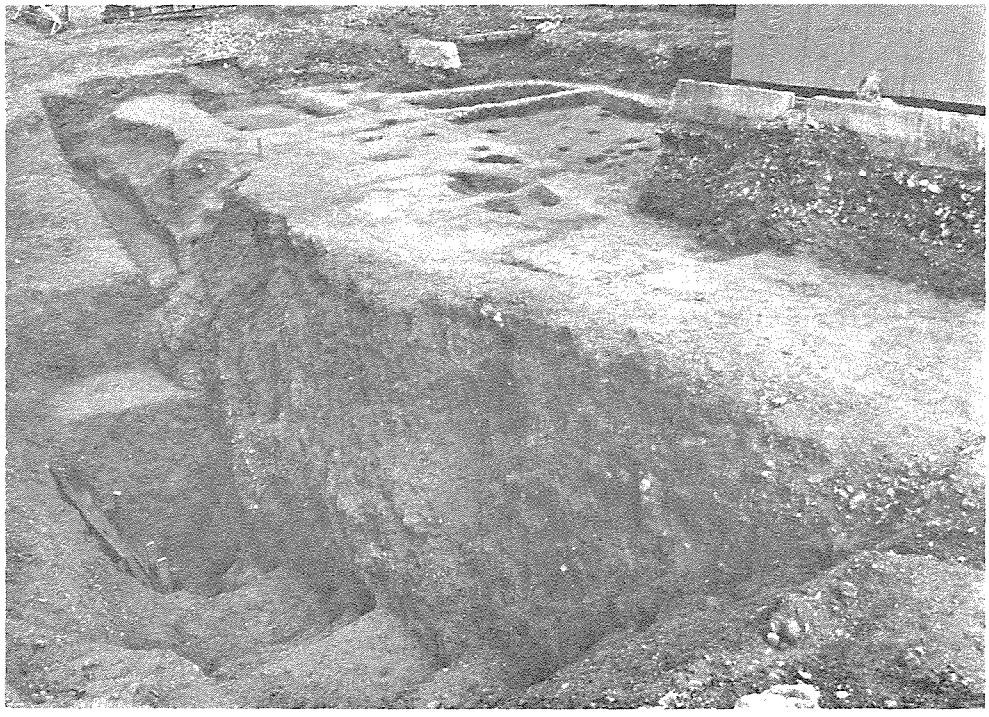


図版９
Ｃトレンチ北部
（南から）

図版10
Ｃトレンチ北端の貯蔵穴
（南から）



図版11　　西郭(南西から)



図版12　　空堀の北壁(東から)

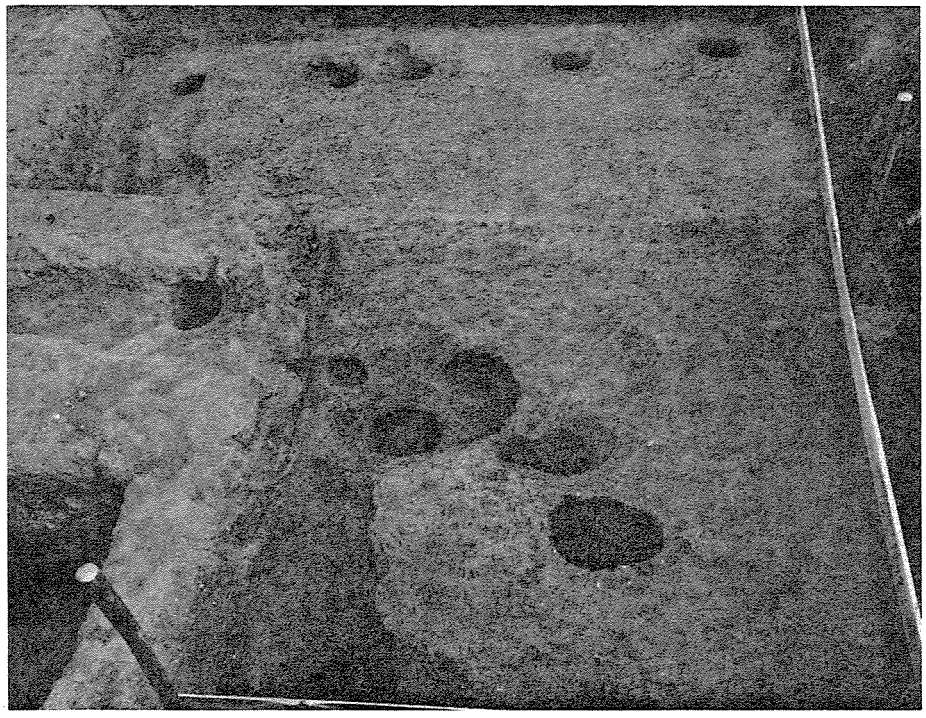
図版13　　西郭(西北より)

図版14　　西郭(北より)

図版15
空堀埋土の土層

図版16　　空堀上の残存土塁(西より)

図版17　　西郭下層遺跡(南西より)



図版18　　西郭下層遺跡(北より)